

モーニング・レイン

Title

【十七歳の日記 1973】

井上一馬

Name



Class

新潮社

モーニン
十七歳の日記



著者について

1956年、東京生まれ。東京外国語大学卒業。
最初の翻訳書となったボブ・グリーンの『ア
メリカン・ビート』がベストセラーになった。
著書に、34歳の日記『自由が丘物語』（新潮
社）とエッセイ集『優しい時代』（PHP研
究所）がある。

モーニング・レイン じゅうななさい に つ き 十七歳の日記1973

著者——いのうえかず ま井上一馬

© Kazuma Inoue 1992, Printed in Japan



発行——1992年5月15日

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

〒162東京都新宿区矢来町71

電話——営業部 03-3266-5111

編集部 03-3266-5411

振替——東京4-808

印刷所——錦明印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-381002-5 C0095

価格はカバーに表示してあります。

モーニング・レイン

十七歳の日記 1973

*

目次

1月	1年G組	7
2月	愛しき乙女たち	33
3月	ポルノ映画	51
4月	恋の予感	69
5月	合唱祭	85
6月	彼女	105
7月	危険なふたり	123

8月 忍び寄る影 139

9月 苦悩 157

10月 立高祭 171

11月 愛する人へ 187

12月 嵐の前の静けさ 203

十九年後 219

あとがき 224

モーニング・レイン

十七歳の日記

1973

亡き千葉泰樹に

1
月
*
1
年
G
組

1月1日（月曜日）

いまは、昭和四十七年（一九七二年）十二月三十一日の深夜。除夜の鐘を聞きながら、この日記を書いている。

居間のテレビでは、紅白歌合戦が終わり、ゆく年くる年が始まっている。毎年、大晦日のこの時間になると、なぜかわからないが僕は、居ても立ってもいられないような、わけのわからない、切ない焦燥感にかられる。

今年のレコード大賞は、小柳ルミ子の「瀬戸の花嫁」と和田アキ子の「あの鐘をならすのはあなた」を抑えて、ちあきなおみの「喝采」が受賞した。最優秀新人賞には、森昌子の「せんせい」や三善英史の「雨」といった候補曲のなかから、麻丘めぐみの「芽ばえ」が選ばれた。

あと十分ほどで立川高校（立高）での一年目が終わろうとしている。

今年一年で自分がずいぶん変わったような気がする。いまから振り返って考えてみると、今年は僕にとってかなり楽しい年だったような気がする。

小学校のころからずっと思い続けてきた植松（玲子）さんには結局ふられてしまったが、立高に入ることができた。

僕には立高の水が合っていた。

中学校時代、僕は自分が優等生として見られるのが嫌で嫌でしかたがなかったが、いまの僕はもう優等生でもなんでもない。中学校のころは、僕はどこかで友達に、お前はちがうんだという目で見られているような気がしていた。

だが、立高には、中央線の駅でいえば三鷹から立川、八王子を経て高尾までの、いわゆる勉強のできる人間が集まっているから、少しぐらい勉強ができたって、そんなことはぜんぜん関係なかった。先生たちも放任主義で、こんなに自由でいいんだろうかと思うぐらいなんでも自由にやらせてくれる。すべては生徒の自主性に任されている。それでもみんな陰ではけっこう勉強してらみたいけど——藤井先生（藤井尚）とかクラス委員の柴山（大）とかはとくに——この学校では、それはそれっていう感じになっている。

もちろん、一步立高の外に出れば、巷では、受験戦争、受験戦争と騒がれている。そんななかで、立高のなかだけはエア・ポケットのようになっていて。いうまでもなく、みんな大学受験のことは考えているが、立高では、ある者はひそかに受験勉強をやり、ある者はそれを先延ばしにし、ある者はいまのところはそれを無視している。みんなあるていど勉強ができるから、おっとりとかまえているのかもしれない。

そういう意味で、とにかく立高は僕にとっては居心地のいい学校だった。僕ははじめて、勉強ができるという以外の自分で友達と付き合うことができた。

だが、自分が変わったということが、はたして喜ぶべきことなのかどうか僕にはわからない。僕自身としては一刻も早く、確固とした（変わらない）自分を確立したいと思っている。具体的

に言えば、人に優しくて明るくて決断力のある人間になりたい、と僕は思っている。これが来年の——いやもう今年になったな——今年の僕の最大の目標だといってもいい。

それから今年は、絶対に彼女を作りたい。植松さんのことはもう忘れて、新しい彼女を作りたい。

本もたくさん読みたい。そしてその感想を必ずこの日記に書くようにしたい。

バスケット部のレギュラーにもならなければならない。いまはまだ一年なので仲間は誰も試合には出られないが、今度の四月に二年になったら、絶対にレギュラーになりたい。

ギターもうまくなりたい。そのために、今年は毎日一時間は練習するようにしよう。

それから毎日この日記をつけること。日記をつければ文章がうまくなる、と浅野先生がいつていた。文章がうまくなければ、詩人や作家になどなれるはずがない。短くてもいいから、毎日なにかひとつのことについては絶対に書くようにしたい。

1月2日（火）

親父とおふくろに付き合って、一年ぶりに群馬の田舎へ行ってきた。

親父とおふくろは毎年正月に自分たちの実家のある群馬に帰っているが、僕は田舎になんかぜんぜん行きたくない。友達と遊んでいたほうがずっといい。早く学校が始まってほしい。

叔母さんたちは僕のことを見て「変わった、変わった」といった。でも叔母さんたちは、いったい僕がどう変わったと思っているのだろうか？ たぶん、ただ単に大人っぽくなったというだけ

のことなのだろう。

1月3日（水）

忘れないうちに、去年一年間に起きた自分の重大ニュースを書いておこうと思う。

1 まずなによりも立川高校に合格したこと（正確には、立高は国立立高校と七十二群というグループを作っているのですが、僕は七十二群に合格して、機械的に立高に振り分けられたにすぎない。だが僕は、立高のほうに入れてよかったと思っている。立高には、ずっと昔男子校だったころの気風がまだ残っていて、じっさいには単に機械的に振り分けられたにすぎないのに、立高生はみんな国高生のことを軟弱だと思っている）。

2 植松玲子さんと別れたこと。

3 夏休みに二週間、梶野（正美）といっしょに北海道へ旅行に行ったこと。

4 はじめての立高祭での感動。立高祭については今年もあるので、この日記のなかでおいおい書いていきたい。

5 はじめてアルバイトをやったこと。具体的には、家庭教師とサントリーのビール工場での仕事とダスキンの訪問販売。

6 麻雀を覚えたこと。中学校時代の友達の浅見（一彦）の家で。

7 読書の楽しさに目覚めたこと。いまはジッドの『狭き門』を読んでいる。

ほかにもまだありそうな気がするが、いまはこの七つしか思いつかない。

1月4日(木)

人はなんのために生きるのだろうか？

この問題を僕は前からずっと考えているが、いまでもまだ僕にはわからない。

だが、そんな問題はほかにもたくさんある。

人間とはなにか。人生とはなにか。友達とはなにか。親友とはなにか。幸せとはなにか。死とはなにか。愛とはなにか。読書とはなにか。なぜ本を読むのか。音楽とはなにか。学校制度とはなにか。なぜ勉強なんかしなければならぬのか。

わからないことだらけだが、こういう問題を僕は少しずつこの日記のなかで解決していきたいと思っている。

1月5日(金)

今年絶対に彼女を作るためにも、植松さんのことについて、ここできちんと書いておこうと思う。

僕の通っていた中学校でいちばんかわいかった植松さん(ウーちゃん)のことを、僕は小学校のときからずっと好きだった。それなのに、最後の最後になるまで僕はその気持ちを彼女に伝えることができなかった(意気地なしめ)。

だが僕は、春休みになってからとうとうその気持ちを彼女に告白して、去年の三月に、あの植

松さんとはじめてデートをして、いっしょに映画を見にいった。

そうだ。もとはといえば、あの映画がいけなかったんだ。

僕の家は東京の八王子という駅の南口にあつて、北口の繁華街のほうにはあまり行ったことがなかったで、そのころ僕の知っている映画館はひとつしかなかった。だから僕はその映画館に彼女を連れていった。そこには、前に一度「小さな恋のメロデー」という映画を見にいったことがあつた。

だが、ウーちゃんを連れていったとき、その映画館ではとんでもない映画をやっていたのだ。

忘れもしない。それは「ウィラード」という映画で、とにかくネズミが大量に出てくる映画だった。見ているだけで気持ちが悪くなる、身の毛のよだつような映画だった（こんな映画が大ヒットするなんて、アメリカっていう国は少しおかしいんじゃないだろうか）。僕にとつては映画なんてデートの口実にすぎなかったからなんでもいいと思つていたが、この映画だけは僕は絶対に許せない。

その映画があんまり気持ち悪かったもんだから、僕もウーちゃんもげんなりしてしまつて、映画館を出たあと喫茶店に入つても、ぜんぜん話なんか弾まなかった（畜生。書いているうちにまたあのときのことを思い出して怒りがこみ上げてきた。僕は、あの映画を作ったダニエル・マンという男を絶対に許さない）。

それでも僕は、そのデートのあとすぐに彼女に手紙を書いて、高校へ行つても付き合つてほしいと頼んだ。そして彼女から、付き合う、という返事をもらった。

それから五月のはじめごろまで、手紙の交換をした。

六月五日が彼女の誕生日だったので、僕はその少し前に彼女に電話をかけて、誕生日に会いたい、といった。が、その日は彼女のクラブがあつて、会えなかった。

七月二十九日の僕の誕生日にはなんの連絡もなかった。一日中家で待つていたが、なんの連絡もなかった。

九月二日の日曜日に、僕のほうから、会おうと連絡した。

家の人間に話を聞かれないので、僕は彼女に電話をかけるときはいつも近くの公園まで行って、その公衆電話から電話をかけるようにしていた。その日も僕は、公衆電話の前を何度も行ったりきたりして、迷いに迷つたあげくに、勇気を振りしぼつて電話をかけた。

ウーちゃんは、土曜日に返事をする、といったが、その返事は、会えない、ということだった。僕は、話があるから会いたい、と彼女に手紙を出した。その二、三日後に、中学校時代の友達の（岩崎）保に、植松は僕とは性格が合わないといっている、という話を聞いた。

そして九月十七日の日曜日に彼女に会つて、すべてが終わつた。僕は、ウーちゃんに断られるのが嫌だったので、自分から、もう付き合うのはやめようといった。

それから九月二十四日に、やっぱり中学校時代の友達のたこ（高橋裕之）に会つたときに、たこから、植松の友達の小倉が、ウーちゃんは、自分がみんなといっしょにふざけて笑つたりしているのを、僕が軽蔑していると思つてゐる、といっているという話を聞いた。九月の末には、鉄（小山鉄雄）から、植松は、俺が優しすぎるといっている、という話を聞いた。